

## 1. 20周年記念事業に関する報告

### はじめに

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターは、2001年（平成13年）に「営利を目的としないボランティア活動を通じて、相互に学び合うサービスマーケティングという共生の理念を具現化し、本学の教育研究に寄与する」ことを目的に深草キャンパスに設置されました。その後、2004年（平成16年）に瀬田キャンパスにもセンターが開設され、現在に至ります。

センター設立20年目という節目を迎える2021年（令和3年）2月に、次の2点を目的に20周年記念事業を実施するとともに、20年のあゆみと学生スタッフ卒業生および現役学生スタッフのアンケート分析結果をまとめた20周年記念誌を3月に発行することに取り組みました。

- (1) センターの設立から現在までを総括し、本学の卒業生、在学学生、教職員をはじめ、他大学の教職員や大学ボランティアセンターの関係者等と共に、2020年12月～3月にかけて実施したアンケート等の結果なども参考にしながら、「大学におけるボランティアセンターの意義」と「学生時代のボランティア経験が与える影響」について考え、大学ボランティアセンターの可能性を考える機会を創る。
- (2) コロナ禍の中、「あたりまえの暮らしがいかにかに有難いものか」を痛感すると同時に、これまでの「あたりまえ」を社会全体で見直す必要性も求められている。コロナ禍で見えてきた人々の偏見や差別感情、これまで自由に社会参加できなかった人々の存在への気付きなどの経験を元に、これからどのような社会を作っていくのか、改めてボランティアの本質を考え、ともに考える場を提供する。

事業名	ボランティア・NPO 活動センター 20周年記念事業 ボランティアで未来を拓く
実施日時／場所	2021年2月11日（木・祝）10：00～15：00／深草キャンパス成就館 ★オンライン形式で配信
実施主体／運営	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	最大視聴者数：181名 ※見逃し配信145回再生（3月14日時点） 申込数：290名
総合司会	頼田 翔平（理工4） 松田 侑子（国際4）
プログラムⅠ	これまでの取り組み報告『なぜ、龍大ボラセンは元気に続いたのか？』
プログラムⅡ	学生スタッフ経験者へのアンケートから読み解く『龍大ボラセンは何を生み出したのか？』
交流プログラム	主に本学の学生スタッフ 元学生スタッフ 他大学の学生スタッフ等を対象とした交流会
プログラムⅢ	現役学生スタッフによる企画『つなごう未来へのバトン おくろう未来へのプレゼント』 【瀬田パート】「おくりもの」 【深草パート】「未来へのバトン～ボラセンでつながれていくもの～」
プログラムⅣ	対談 安田 菜津紀氏（フォトジャーナリスト）×入澤 崇 龍谷大学学長
その他の取り組み	20周年記念誌および本事業の各種広報



プログラムⅠ：20年のあゆみ動画冒頭部分



総合司会を務めた4回生学生スタッフ

## 【開会の挨拶】

学長の入澤でございます。

本日は、コロナ禍のため、オンラインでの開催となりましたが、こうして多くの皆さまにご参加いただきましたこと、心から感謝申し上げます。

2001年4月に本学は、他大学に先駆けてボランティア・NPO活動センターを開設いたしました。今年で20年を迎えます。在学中、ボランティア活動に勤しんでくれた卒業生は、学生時代に得難い経験を積まれたかと思います。当センターならではの学びがあったはずです。本日は、多くの卒業生が参加してくれているとのこと、大変うれしく思います。指導にあたってこられた現センター長である筒井先生をはじめとする歴代センター長、そして協力していただいている先生方に心より感謝申し上げます。また、学生のボランティア活動をこれまで支えてくれているコーディネーターやスタッフの皆さまに対し、心より御礼申し上げます。

この20年間をふりかえりますと、日本各地で地震や台風、豪雨などの自然災害が発生し、そのたびに大きな被害が繰り返し起こっています。また、それらの災害の被災地では、個人・団体のボランティア活動が報じられ、ボランティアへの関心と重要性が増してきております。

本学でもボランティア・NPO活動センターが事務局となり、東日本大震災の復興支援活動をはじめとするボランティア活動に多くの学生が参加いたしました。このボランティア活動を通して学生たちは、被災地の状況や抱える課題と現実を目の当たりにし、多くのことに気づき、そして深く考え、模索する機会を得たのであります。

さて、本学は2019年度に、創立380周年を迎えました。創設以来、親鸞聖人が開かれた「浄土真宗の精神」を建学の精神に掲げ、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間の育成に努めてまいりました。

本学では、すべてのいのちを大切にす利他的な生き方を培います。私は、2019年度の創立380周年において、基本コンセプトとして行動哲学「自省利他」を掲げました。「自省」、自分は果たしてこのままで良いのかと自らを省み、



開会にあたり挨拶する入澤 崇 学長

「利他」、他者の安寧に資する行動を心がける。この「自省利他」が、混迷の度合いを深める現代社会にとりわけ必要と考えています。

残念ながら、今、世界では、他者を排除しようとする排他的感情が渦巻きつつあります。自分さえよければいいという自己中心的な事象が、昨今とりわけ目につきます。さらに、新型コロナウイルスが私たち人間同士を物理的に引き離し、つながりあうことを阻害しています。その一方で、この新型コロナウイルスは、今後私たちがどうあるべきか問い直す機会を与えてくれたのではないかと受け止めてもいます。コロナ禍の今だからこそ、自分さえよければいい、ではなく「自省利他」を実践し、互いに励まし合い、助け合い、支え合い、共に力を合わせて困難を乗り越えて行かねばなりません。

本日のフォーラムは、『ボランティアで未来を拓く』のテーマで、「大学におけるボランティアセンターの意義」や「学生時代のボランティア経験が与えた影響」を踏まえつつ、今後の可能性を考える。また、コロナ禍で見えてきた社会課題にも触れ、改めてボランティアの本質や、コロナ禍の中で求められる活動について考えると考えております。

これからの人と人との新たなつながり方を模索するうえで、大きなヒントが得られるのではないかと期待しております。

開催準備にあたってくれた学生スタッフのみなさん、こうした機会を設けてくれて本当にありがとうございます。最後になりましたが、ご参加の皆様にとって実り多いフォーラムとなりますこと、心から念願し、私のご挨拶とさせていただきます。本日は、ありがとうございます。

<b>プログラム I</b>	<b>これまでの取り組み報告『なぜ、龍大ボラセンは元気に続いたのか？』</b>
実施・配信時間	10 時 10 分～ 10 時 55 分
出演および関係者	【講演】 筒井 のり子 センター長（社会学部教授） 【動画制作】 國實 紗登美 コーディネーター 竹田 純子 コーディネーター 【動画出演】 深草・瀬田の学生スタッフ有志

1. 趣旨・目的

設立 20 年を迎えるにあたり、大学ボランティアセンターの役割と設置数などの現状を踏ましつつ、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの特徴や、ここまで続いた理由などを参加者に改めて知ってもらうために実施しました。

2. 概要

筒井のり子センター長が、パワーポイントの slides を中心に、一部動画を交えながら以下の流れで講演しました。

- ① センター設立から 20 年のあゆみや、これまでのセンター事業、学生スタッフの活動などをダイジェストにまとめた動画上映



- ② 龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの概要・運営体制や今までの学生スタッフ企画などの紹介

**ボランティア・NPO活動センターの概要**

龍谷大学 9学部・1短大・10大学院  
大宮キャンパス(京都市下京区) 文学部  
深草キャンパス(京都市伏見区) 文学部、経済学部、経営学部、法学部、政策学部、国際学部、短大  
瀬田キャンパス(滋賀県大津市) 理工学部、社会学部、教育学部

【ボランティア・NPO活動センター】  
方針 ①学生のボランティア活動への参加を促進し、学生自身の成長につなげる  
②学生、教職員のボランティア活動を通じ、地域社会への貢献を行う

深草センター 2001年10月設置 課長、課員 ボランティアコーディネーター2名 アルバイト2名 (学生スタッフ 約50名)	瀬田センター 2003年10月設置 課長、課員 ボランティアコーディネーター2名 アルバイト1名 (学生スタッフ 約50名)
--	--

**センターの位置付けと現在の運営体制**

学長のもとにある独立横断型組織  
(担当副学長・担当理事(学部長))

ボランティア・NPO活動センター委員会  
(年4回開催)  
・センター長(教員)  
・副センター長(教員)  
・事務部長  
・センター長が推薦する委員(教職員)  
\*オブザーバー(各キャンパス学生代表)

ボランティア・NPO活動センター会議 (月1回)  
・センター長・副センター長  
・課長・課員  
・ボランティアコーディネーター  
・学生スタッフ

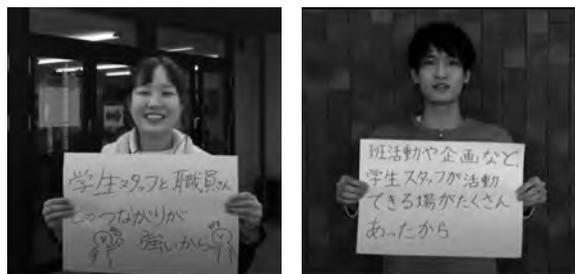
学生スタッフ会議 <深草・瀬田> (月1回)  
・センター長  
・課長、課員  
・ボランティアコーディネーター

★学生スタッフは、2つのセンター合わせて約100名

**学生スタッフの企画の一部**

- 【春の企画】 春の企画「世界に目を向けて〜」
- 【学内のエコ】 リニューアルプロジェクト
- 【地域の方々と共に】 大津駅 丸善町四角交差点 深草ふれあいプラザ
- 【心のバリアフリー】 生きも楽ら
- 【実習を自分ごと】 オープン講座

- ③ 現役学生の一言コメント動画『なぜ、龍大ボラセンは元気に20年続いたと思うか？』



④ センター設立の経緯や活動場所の推移、職員体制などを交え、龍大ボラセンが元気に20年続いた理由を説明

**なぜ、龍大ボラセンは“元気に”20年続いたのか**

**その1**  
そもそも、教職員・学生有志によって、ボランティアに作られてきた

当初は、1997年に教職員有志が企画運営  
・第4次長期計画策定のプロセスで、1999年12月にセンター設置プロポーザルを決定  
・2001年1月にセンター設置の誓いを学員に提出  
・各系(ボランティア・NPO活動センター)への思い  
学生へのボランティア情報提供などの支援をするだけでなく、社会課題の解決に取り組み(幅広いNPO/NGOとの連携、そしてセンター自ら取組んでいく！)

龍田のセンターは、学生が声を挙げて！  
・2002年5月に、龍田で「ボランティア・市民活動相談会」開催、運営委員44名を初任として発着  
・センターの必要性について、龍田にアンケート調査(約600人)  
・2003年9月から龍田、龍田前期でコーディネート活動開始  
・2003年10月に龍田キャンパスにセンター開設！

**なぜ、龍大ボラセンは“元気に”20年続いたのか**

**その2**  
学生スタッフが自由に集い、議論できる「場」を確保してきた

【龍田キャンパス】  
・設立当初は、学内者もほとんど知らないような場所から(2003年5月から1号館1階へ)  
→(事務室と別に、学生スタッフの部屋を確保)  
★ここから学生スタッフが日常的に集まりました  
→1号館改築に伴い、学友会館へ  
→学友会館改築に伴い、旧図書館へ  
→新学友会館(成録館)1階へ

【龍田キャンパス】  
・学生有志の有志ボラセンからスタート  
・2003年10月に有志会(食堂)2階の遊戯室の一角に設置  
・2006年に購買部の移転後の建物へ

**なぜ、龍大ボラセンは“元気に”20年続いたのか**

**その3**  
専門職として、ボランティアコーディネーターを配置してきた

当初は、大学側がアルバイトで専任  
→2009年4月より、専任事務職員とボランティアコーディネーター(嘱託職員、任期あり)配置  
→2004年からは、龍田にもボランティアコーディネーター(嘱託職員、任期あり)配置  
→2006年度から、コーディネーターを専任と龍田にそれぞれをずつと増員(嘱託職員、任期あり)  
→2014年度から、「職務規定職員(専門職)」として任期がなくなる

4人とも「ボランティアコーディネーション」1級または2級を取得(認定NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会主催)  
※1級は全国で98人のみ

ボランティアコーディネーターの専門性  
①人々の参加の意欲を高める  
②人々がともに課題解決に取り組むことを支える(協働関係づくりを支援する)  
③活動を通して抱えた課題をともに取組んでいく(問題の社会性を支援する)

**なぜ、龍大ボラセンは“元気に”20年続いたのか**

**その4**  
教員、職員、学生の協働による運営を可能にするような会議の仕組みを作ってきたこと

設立5年目ごろに危機  
(学生スタッフ、コーディネーターの思いのズレや負荷など...)

学生、職員、教員が一緒に議論して意思決定する場がなかった！

2006年度から  
①「ボランティア・NPO活動センター会議」(ボラセン会議)を創設  
②「ボランティア・NPO活動センター委員会」に学生代表がオブザーバー参加

**なぜ、龍大ボラセンは“元気に”20年続いたのか**

**その5**  
課外活動としての位置付けを徹底してきたこと(課外単位や成績と運動させない)

たとえば、授業科目「ボランティア・NPO入門」の運営協力を行なっているが、ボランティア活動してみたい学生は、個別にセンターに相談に来てもらうようにしている。

FDL(問題解決学習/課題解決学習)が注目されており、ボランティアセンターの事業が正課科目との運動で展開されることも多い。  
本学では、もちろんそうした学習形態の重要性を認識し、各学部で正課教育として徐々に展開しているが、ボランティアセンター事業とは切り離している。

- ・ご関係者、卒業生、教員の方々のサポートの根底には、建学の精神が大学の教育の中でしっかりと反映されているという印象を受けました。
- ・ボラセンは学生が自分たちで声を上げ、創ってきたのだと改めて感じました。ボランティアを紹介するだけでなく、自分たちが企画してボランティア活動を行い広めていく、ということが印象的でした。
- ・常に学生の声を受け止め、ともに行動していく姿勢、そしてより良い方向へ変革していく力がボラセン全体にあるのだと感じました。学生を常に真ん中に置きながら、日々取り組まれているという印象を受けました。
- ・一般の方はあまり興味がないであろうが、大学関係者には興味がある大学内の会議の持ち方等についてまでお話しいただき、共感できるとともに大変参考になった。コーディネーターの任期がないというのは驚きとともに、人事異動のない専門職というのは大学のような組織の中ではマネジメントすることの困難さを伴うのではないかと感じた。
- ・20年のプロセスの中では、本日報告されなかったことも含めていろいろな苦難や喜びもあったと思います。しかし、学生の主体性を軸に、信念をもってボラセン運営を進めてこられたことがとても伝わり、大変感銘を受けました。

3. 参加者の声・得られた効果など

視聴者アンケートでは、以下のような声が得られました。

<b>プログラムII</b>	<b>学生スタッフ経験者へのアンケートから読み解く『龍大ボラセンは何を生み出したのか?』</b>
実施・配信時間	11 時 00 分～ 12 時 00 分
出演および関係者	<b>【アンケート分析報告】</b> 國實 紗登美 コーディネーター <b>【元学生スタッフインタビュー】</b> 伊藤 ゆかり (2011 年度社会学部卒) 池上 慎平 (2012 年度法学部卒) 玉置 友圭子 (2012 年度国際文化学部卒) 西山 大樹 (2018 年度政策学部卒) 竹田 純子 コーディネーター (聞き手) <b>【アンケート総括】</b> 工藤 保則 センター委員 (社会学部教授) 筒井 のり子 センター長 (社会学部教授)

**1. 趣旨・目的**

2020 年 1 月～ 3 月にかけて元学生スタッフや現役学生スタッフに向けて実施したアンケートの結果から見えてきたものを分析・報告し、在学時に役職を経験した元学生スタッフへ当時からふりかえるインタビューを行いながら、「大学におけるボランティアセンターの意義」と「学生時代のボランティア経験が与える影響」について考え、大学ボランティアセンターの可能性を考える機会を創りました。

**2. 概要**

**【アンケート分析報告】**

國實コーディネーターより、『学生スタッフ・元学生スタッフ「ボランティア」および「大学ボランティアセンター」に関する意識調査』の分析結果について、パワーポイントでグラフなどにまとめたものを見ていただきながら報告しました。

調査概要と報告内容の一部は次の通りです。

**調査の概要**

**■調査の目的**

大学内にボランティアセンターがあることの意義や学生時代のボランティア活動が進路に与える影響等を明らかにし、今後のボランティア・NPO 活動センターの運営に役立てると共に、大学ボランティアセンターの運営に関わる人たちにも役立てる。

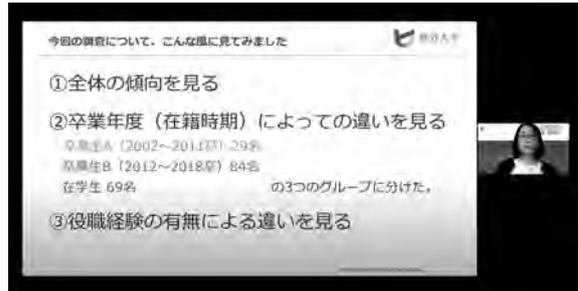
**■調査方法**

- ・卒業生：郵送による配布・回収（一部、卒業生の希望によりメールにて配布・回収）
- ・在学生：対面による配布・回収

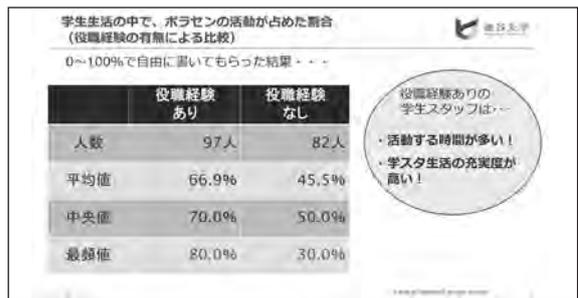
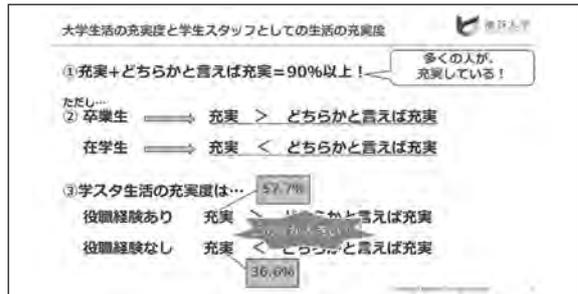
**■調査期間**

- ・卒業生：2020 年 1 月 8 日（水）から 237 通を配布、1 月 29 日を返信期限として 111 通回収。（※一部、メールにて配布、2 通回収）
- ・在学生：2020 年 2 月 3 日（月）から 3 月 13 日（金）まで配布し、68 通回収。

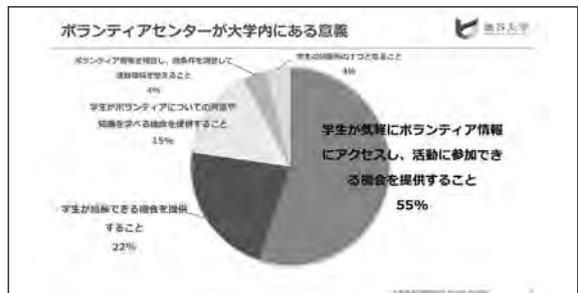
**■回収状況** 181 通（卒業生・在学生合計）

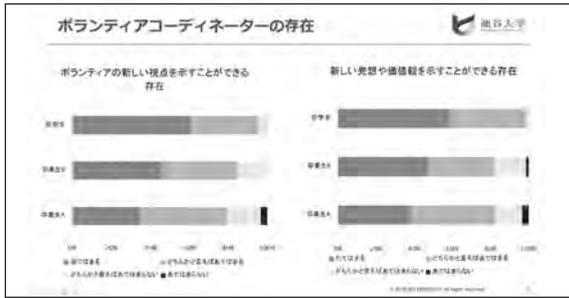


○学生スタッフとしての生活の充実度や、学生生活の中でセンターの活動が占めた割合について



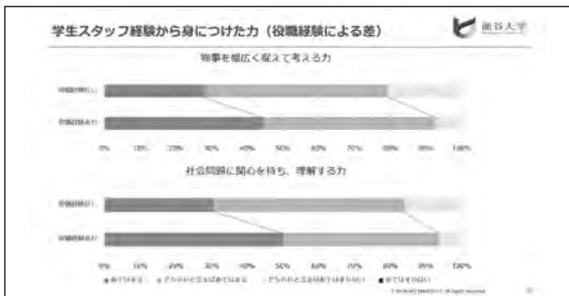
○ボランティアセンターが大学にある意義や、ボランティアコーディネーターの存在について



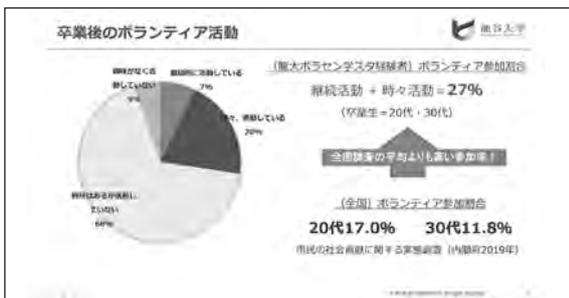


ボランティア中の学生時代の池上さん

○学生スタッフ経験から身につけた力や、卒業後のボランティア活動について



10周年事業の時の伊藤さんと玉置さん



学生スタッフ企画で話す西山さん

【元学生スタッフインタビュー】

役職経験のある卒業生4名とオンラインで繋ぎ、竹田コーディネーターがインタビューしました。学生スタッフ時代の写真を見せながら、印象的だったことや学生スタッフ仲間と一緒に頑張ったことをふりかえり、センターやコーディネーターの存在が自分にとってどのようなものだったか、また、役職経験がどのように現在に活かしているかなどを、具体的なエピソードを交えてお話しいただきました。



竹田 コーディネーターと元学生スタッフのみなさん

【アンケート総括】

社会調査が専門で今回のアンケートを監修した工藤センター委員より、アンケート内容を検討する段階から回収後の分析・報告に至るまでのエピソードを交えながら、コーディネーターと共に作り上げた本調査の意義について筒井センター長と意見交換をしました。



工藤 センター委員と筒井 センター長

3. 参加者の声・得られた効果など

視聴者アンケートでは、以下のような声がありました。

- ・ボランティアセンターは、学生のリーダーシップ開発に大きく貢献できたのだということがよく分かりました。コーディネーターや学生が主体となりながら、社会学の専門家を巻き込んだ調査研究を行い、その結果を可視化できたことは大きな成果だと思います。
- ・積極的かつ主体的にボランティア活動に取り組んできた歴代の学生メンバー、それを継承している現役メンバー、それらを長年にわたりサポートしているボラセンスタッフの皆様、それぞれの立場の内面から生み出されているのは、まさに入澤崇学長が強調されておられる「利他」を実践する人間像だと思います。
- ・「良かった」というお話ばかりだったような気がする。今後の課題なども詳しく聞きたかった。
- ・ボランティアは得てして感覚や個人的な熱量で「これが成果だ」と主張する人や組織が多いが、社会調査法に基づいた量的調査をしっかりとされているのは驚きとともにうらやましいと思った。一方で質的調査もできるであろうコーディネーターと学生の結びつきの強さも感じた。また現役の学生だけでなく卒業生とコーディネーターがしっかりつながっていることはなかなかできることではないので、すごいなと思った。
- ・学生の追跡調査はとても興味深かった。卒業生の結果について、アンケートに答える卒業生はポジティブな評価をしやすいのではないかと気になったが、解析されているとのことだったので、結果を拝見するのが楽しみです。

交流プログラム	20周年事業参加者（元学生スタッフ、他大学ボラセン、地域団体など）と現役学生スタッフの交流会
実施・配信時間	12時00分～12時55分 (開始前に、学生スタッフからの20年をふりかえるプレゼント動画を放映)
企画メンバー	<p>【深草キャンパス】</p> <p>神田 瑞季(経済3) 西野 亜優(経済3) 安本 大輝(法学3) 谷垣 俊弥(法学2) 井関 萌乃(文学1) 喜多 真央(文学1) 岡田 祐依(経済1) 三野 涼介(経済1) 松本 航紀(経営1) 山本 那津子(短大1)</p> <p>【瀬田キャンパス】</p> <p>松本 優甫(理工3) 東 里音(社会3) 木下 綾華(社会3) 佐藤 瑛蓮菜(社会3) 高岡 宏幸(社会3) 土肥 亮太(社会3) 南 佳奈(社会3) 余村 瑠香(社会3) 近藤 真佑華(農学3) 橋本 奈津子(農学3) 小沼 芳暉(理工2) 安原 拓真(社会2) 吉岡 秀太(社会2) 川上 賢人(農学2) 岸野 洋祐(農学2) 小谷 悠真(農学2) 大和 虹輝(農学2) 高橋 慶多(社会1) 深木 真人(社会1) 谷垣 美幸(農学1) 鳴海 彩紀(農学1)</p> <p>【動画制作】 渡中 新太郎(農学3)</p>

## 1. 経緯・目的

ボランティア・NPO活動センター設立20周年事業の交流プログラムにおいて、参加者間のコミュニケーションを図る場や息抜きの場が必要だと考え、このような交流の場を企画しました。

また、この交流プログラムは全行程の休憩時間に実施し、冒頭には学生スタッフ制作のプレゼント動画を放映しました。

## 2. 概要

### ○タイムスケジュール

12:00 学生スタッフからのプレゼント動画放映、交流プログラム開始・開会式

12:10 参加者がトークルームに移動、交流開始

12:45 交流終了・閉会式

12:55 プログラム終了

### ○トークルームのテーマ

- ルーム 1 コロナ禍の今、良いチーム作りのために、どんなことを意識する？
- ルーム 2 あなたが今、大学生ならどんなボランティア企画をしますか？
- ルーム 3 龍大ボラセンの紹介と他大学のボラセンとの比較
- ルーム 4 龍大ボラセンの今と昔を語り合おう！
- ルーム 5 東日本大震災復興支援ボランティアを語り合う
- ルーム 6 ボランティアに興味を持ったきっかけ
- ルーム 7 ボランティアをしたことによる自分自身の変化
- ルーム 8 ボランティア経験が生かされた場面
- ルーム 9 ボランティア体験を語り合う
- ルーム 10 就活に向けてのアドバイス
- ルーム 11 大学生のうちにやっておくべきこと
- ルーム 12 大学時代のエピソード
- ルーム 13 聞かせて！社会人経験談

### 3. 参加者の声・得られた効果など

- ・地域団体でも参加しやすくて良かった。
- ・学スタがスムーズに司会を務めてくれてすごいと思った。
- ・卒業生の声が聞けて良かった。
- ・先輩と直接話をさせていただいて、有意義でした。卒業生から一言いただけることは良い経験で、うれしかった。20周年があったからこそできたこの会で聞けたお話を忘れないようにしたい。
- ・世代や地域を越えて、卒業した先輩や現役学生と交流できて楽しかった。
- ・先輩方からいろんなお話を聞かせていただいて、とても有意義で楽しい時間になりました。あっという間でもっと話したい！となるくらいでした。



トークルーム運営中の学生スタッフ

### 4. 学んだこと・今後の課題

この企画では瀬田・深草両キャンパスの学生スタッフで協力して行ったり、リハーサルでも両キャンパスの合同 LINE で呼びかけを行ったりしたことで、準備の段階から両キャンパスで交流を深めることができました。事前にトークルームごとにリハーサルを2回ずつ行い、そこで気づいたことを LINE で共有することでリハーサルに参加できなかった人も注意点等を確認することができて良かったです。

また、今年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、多くの企画が中止になってしまいました。1回生は本来、夏休みや秋の行事などで企画の経験を積みますが、それができませんでした。この20周年事業の機会を活かして、1回生にも企画への参加の機会を作ることができ、トークルームの司会などの運営等で経験を積んでもらったのは良かったと思います。

一方、反省点としては、トークテーマごとに参加者に偏りがあり、人数の多かったルームでは話し足りなかった参加者もいたようなので、声かけをするなど人数が分散する工夫が必要だったと考えます。

上記の参加者の声にあるように、卒業生や地域の方と現役の学生がコミュニケーションを取ることができたので、楽しい時間を作ることができ、目的を達成できたように思います。

〈報告者：谷垣 俊弥〉



トークルーム運営の学生スタッフと元学生スタッフなど参加者のみなさん



学生スタッフ制作の20年をふりかえるプレゼント動画

<b>プログラムIII</b>	<b>現役学生スタッフによる企画 『つなごう未来へのバトン おくろう未来へのプレゼント』</b>
実施・配信時間	13時00分～14時00分
企画メンバー	<p>【瀬田パート】「おくりもの」          青山 友香(社会3) 赤木 宏斗(社会3) 東 里音(社会3) 木ノ上 莉那(社会3)          堤 花成(社会3) 平井 美来(社会3) 大屋 晴太郎(農学3) 渡中 新太郎(農学3)          矢羽田 聡志(理工2) 朝野 健太(社会2) 家原 美月(社会2) 井尻 由梨香(社会2)          一色 剛滉(社会2) 杉山 わかな(社会2) 林 大誠(社会2) 遠藤 瑞規(先端1)          小川 俊也(社会1) 片岡 克望(社会1) 高橋 慶多(社会1) 松村 優輝(農学1)</p> <p>【深草パート】「未来へのバトン～ボラセンでつながれていくもの～」          吉田 樹(法学4) 安本 大輝(法学3) 世田 丈貴(法学3) 浜田 葵(文学2)          早川 歩伽(文学2) 石井 翔大(法学2) 園原 聖(法学2) 竹内 裕人(法学2)          谷垣 俊弥(法学2) 徳田 光輝(文学1) 崇田 ゆきの(文学1) 大原 健太郎(経営1)          稲継 由奈(国際1)</p>

## 1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センターが2001年に発足してから20年を迎えました。この節目に活動している現役学生スタッフとして、設立20周年事業のプログラム3で参加者に以下のことを発信します。

### 【深草】

まず、未来の学生スタッフに20周年の時にはこんなすごい企画をしたんだと感じてもらえるようなものを作りたいとなりました。そしてこれからのボランティア・NPO 活動センター(未来)につないでいくために、今までの活動(過去～現在)で私たち自身が頑張ったことや苦労したことをふりかえり、今後私たちが取り組んでいきたいことや挑戦する思いを伝えます。

### 【瀬田】

未来のセンターがつまづいた時や2030年の事業が行われるときなどに参考になるものを残し、未来の学生スタッフの指針になるようなものを作りたいと考えました。私たちは未来のセンターが発展していくことを望んでいます。よって未来のセンターがどうすればもっと良くなるのかを考え、未来の学生スタッフに自分たちの意見を残そうと考えました。「ボラセンの未来を明るくする」を目標とし、オンラインプログラムを実施します。

## 2. 概要

- 13:00～13:03 挨拶と瀬田・深草の企画趣旨説明
- 13:03～13:26 ①瀬田の発表
- 13:26～13:50 ②深草の発表
- 13:50～13:55 ③参加者の感想を全体で共有
- 13:55～13:56 まとめ

### ①瀬田の企画概要

この企画を行うにあたっての目標を「ボラセンの未来を明るくする」としました。そしてこの目標のもと、「ボラセン向上委員会」「学スタ向上委員会」の二班に分かれ、それぞれの視点からセンターの未来がどうすればより発展するのかを考え、パワーポイントを使用し、発表をしました。

### ②深草の企画概要

「未来へのバトン ボラセンでつながれていくもの」を企画のタイトルとし、今まで先輩がやってきた活動や2020年のコロナ禍での活動、またなりたい自分や未来に伝えたいことなどを動画にまとめました。

### ③参加者の感想を全体で共有

参加者からプログラム3全体に対する感想をZoomチャットに書き込んでもらい、それを読みあげながら感謝を伝えるなど、LIVEで双方向のコミュニケーションを行いました。



司会進行役を務めた瀬田と深草の学生スタッフ

### 3. 参加者の声・得られた効果など

- ・今年一年や過去に何があったのかを伝えるだけでなく未来へつなぐという視点が良かった。
- ・1回生にもスポットを当てていて後輩たちに受け継いでいく意思を感じることができてよかった
- ・学生のボラセンの未来への想いがひしひしと感じられた。
- ・自分たちの伝えたいことを整理し、みんなと話合っただけで納得したうえで進めていくという一番大切なことを妥協せずに行えた。

### 4. 学んだこと・今後の課題

#### 【深草】

- ・実際に役割を分担して動画作成に専念できたのは12月に入ってからの、過密なスケジュールになってしまいました。だからできることは早め早めにやることを心掛けていき、スケジュール管理をしっかりしていく必要があると感じました。
- ・企画メンバーを最初に決めていなかったことにより、一人でいろいろなことを抱え込んでしまった人がいたため、企画メンバーのような話し合う仲間を絶対つくっておく

必要がありました。

- ・今回のような動画を作る技術はこれからも必要になる可能性が高いので、主に動画作成をした人を中心とした簡単な動画作成セミナーのようなものを開催して、学生スタッフの動画作成の技術の向上を図っても良いと思いました。

#### 【瀬田】

- ・企画を始めるのが遅れていたため、後半のスケジュールが過密になってしまいました。ある程度のスケジュールを事前に決め、予定を立てていくなどの対応が甘かったです。
- ・ミーティングに参加しているメンバーが少なく、固定化されていました。参加できないのであれば事前に連絡をしてその人の意見を聞いておくなど、不参加でも協力できる部分はあったのでそういったことをすべきでした。

〈報告者：石井 翔大、朝野 健太〉



瀬田の企画「おくりもの」の一場面



深草の企画「未来へのバトン～ボラセンでつながれていくもの～」の一場面

プログラムⅣ	対談『ボランティアで未来を拓く』
実施・配信時間	14時00分～15時00分
出演	安田 菜津紀氏（フォトジャーナリスト）×入澤 崇 龍谷大学学長

### 1. 趣旨・目的

この対談では、設立20周年記念事業『ボランティアで未来を拓く』のタイトル通り、学生に「自分自身も社会を変えることのできる存在であり、当事者である」のだと自覚し、仲間と共に課題解決に向けて行動を始めるきっかけになることを目指しました。

そこで、10代の頃から様々な社会課題と向き合ってこられたNPO法人 Dialogue for People（ダイアログ・フォー・ピープル）所属フォトジャーナリストで、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演されている安田菜津紀氏をゲストに迎え、本学入澤崇学長との対談を実施しました。

### 2. 概要

安田氏には、ボランティアや社会課題と向き合うことに繋がる様々な視点で、入澤学長と対談いただきました。以下のお話の中で「痛みの共感」「リシンク＝立ち止まって考える勇気」など、印象的な言葉の数々を聴くことができました。

- ・コロナ禍だからこそその側面、例えば感染症拡大で皆が不自由な生活を送らざるを得ないことによって、その何倍も困難な状況にある人のことに気づいたり、オンラインを活用した取り組みなど試行錯誤しながら生まれてきたものもあること。
- ・SOSを発信するような状況は誰にでも起こりうる。声にならない声に耳を傾け、大きくくりの主語や数値化することによって見えなくなる個々と関係性を作っているのがボランティアの醍醐味。
- ・東日本大震災に関する安田氏自身のエピソードを通して、伝えること、寄り添うこと、ボランティアすることの難しさについて入澤学長と意見交換。

また、最後に入澤学長が預かった学生からの安田氏への質問に対しても、丁寧にお答えいただきました。

### 3. 参加者の声・得られた効果

- ・いろいろな場面や境遇を見てきている安田氏だからこそその視点や、入澤学長のご経験

からの学生に対する思いなど、自分になかった考えを新たに知ることができた機会になりました。

- ・安田氏の「奇跡の一本松」に関するお話を拝聴し、一つの事象について様々な立場からの見方や考え方があり、そこから生まれる評価や価値観もまた一様ではないということに再認識しました。
- ・「のっぺらぼうになってしまう」という言葉が印象的でした。興味のないこと・遠い国の出来事は疎遠になりがちだが、焦点を当てることで見えてくるもの、自分事と捉えられることなど実際に現地に赴いている方からの言葉は重みがありました。
- ・伝えることの難しさは難題だなと感じました。ひとりひとり価値観が違うなかで、どのように伝えるか、これも相手の考えや生

い立ちなど様々な要因が絡み合っており、非常に難しいものだと思います。伝えること、伝えることは非常に難しいものですが、私も考え続けていきたいと思っています。

- ・ボランティアで、できることが見つけられることもあるれば、できない自分が浮き出ることもあり、他人を支援しているつもりでも自分を知ることにつながっているのだとわかりました。共感「他人ごと」を「自分ごと」にすることであり、そのなかでの気づきが根源的な学びへの動機にもなることがわかりました。また、独りよがりではない支援のために、相手の気持ちを聞きながら活動する大切さを改めてお聞きすることができたので、忘れないようにしたいと思います。



入澤 崇 学長と安田 菜津紀 氏の対談の様子

## 【閉会の挨拶】

みなさま、朝 10 時から 4 つのプログラム、昼休みの学生の交流企画をお届けしてまいりました。いかがでしたでしょうか。

プログラムⅣの対談で、安田さんが「コロナ禍で大変だけれども、その中から試行錯誤をして生み出されているものがある」とお話しされていました。そして、入澤学長も「このコロナ禍は大変だけれども、何か新たな一步を踏み出す、そういう良い機会としていく必要があるのではないか」と述べておられました。今回の 20 周年の記念事業は、まさにそうだったと思います。

この 20 周年のイベントに関しては、1 年以上前から検討してきました。当初は、一堂に集まって対面という内容を企画していましたが、コロナ感染拡大の状況下、延期、中止、規模縮小等、どのように実施するべきか関係者で検討を重ねたのち、オンラインで開催することになりました。その結果、ご覧いただいたように学生と協力しながら、動画作成をはじめとするさまざまな工夫を凝らして、チャレンジしたものになりました。単に新しいスキルを使いこなせたというだけでなく、今回この形で実施できたというのは非常に大きな意味があったと思っています。

現役学生スタッフによる企画のプログラムⅢで、1 年生がたくさん登場していたことに、お気づきいただけでしょうか。前期は入構制限などで実際の活動は後期から始まったため、1 年生はセンターの事業や地域でのボランティア活動を経験できていません。ともすれば、今までのことを知っている上回生だけで企画を進めていこうということになりかねないところ、今回多くの 1 年生・2 年生も積極的に参加して役割を果たしてくれました。

設立以降の膨大な写真の中から選んで動画を作成したり、過去の資料をもう一度見直したりといったプロセスの中で、センターの重要な理念や先輩たちが大事にしてきたような想い、それらを単に誰かから言葉で伝えられるのではなく、実体験、追体験のような形で感じてくれたのではないかと思います。そのことがこの 20 周年の事業としてとても大きな意味があった、バトンをいろんな形で繋げていけるのではないかと思います。

本日は約 200 名の方、沖縄から東北、それからフィリピンからもご参加いただきました。そして各地にいる卒業生のうち、オンラインだからこそ登壇していただけた方もいました。これからま

だまだコロナの状況や大変なことが多々起きると思いますが、私達は世の中の動きに関心を持ち、色々な痛みに敏感になってそれを共有し、そして様々な他者ときちんと対話をして協働していける学生や、自分の言葉で自分の想いや考えを語っていける学生が育っていくことを願って、教職員・学生スタッフ一同、ボランティア・NPO 活動センターの運営をこれからも頑張っていきたいと思えます。引き続き、皆様方のご協力・ご支援をよろしく願いいたします。

本日は、長時間ご参加いただき、誠にありがとうございました。これを持ちまして、閉会のご挨拶とお礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 【視聴いただいた皆さんからのメッセージ】

- ・コロナ禍の大変な中、先週の東日本大震災 10 年のイベントに続き、このセンター創設 20 周年の事業にも取り組まれたこと、あっぱれです。お疲れさまでした。両イベントとも、とても素晴らしいものでした。しかもともに学生の皆さんの参画によって練られ、進行されたことにも感銘を受けました。両センターのコーディネーターの皆さんや教職員の皆さんの支えも含めて、素晴らしい取り組みでした。今後も、この姿勢を継続・発展していただくことを期待しています。
- ・20 周年、おめでとうございます。記念すべき年に未曾有の出来事が起こり大変だったとは思いますが、1～4 回生までが協力して 1 つのものを創り上げている作品を見てこれからは元気に続いていくのだろうと感じました。ボラセンに所属していたことを誇らしく思います。今後もこのような状況が続く大変かとは思いますが、頑張ってください。
- ・素晴らしい企画をありがとうございました。オンライン開催により、遠隔地からも参加できて非常にありがたかったです。これからは時代に沿った大学ボラセンの姿を見せ続けてください。

その他の取り組み	20周年記念誌 および 本事業の各種広報
取り組み期間など	20周年記念事業広報期間：2020年11月～2021年3月 20周年記念誌発行：2021年3月31日
記念誌関係者	【執筆】筒井のり子 センター長(社会学部教授) ヒギンズ尚美 コーディネーター 國實 紗登美 コーディネーター 竹田 純子 コーディネーター 【寄稿】現役学生スタッフ 元学生スタッフ 関係教員 関係団体の皆さん 【協力】工藤 保則 センター委員(社会学部教授) 猪瀬 優理(社会学部准教授) 【編集】ヒギンズ尚美 コーディネーター 國實 紗登美 コーディネーター
広報関係者	【チラシ制作】上手 礼子 コーディネーター 【動画制作】一色 剛滉(社会2) 渡中 新太郎(農学3) 世田 丈貴(法学3) 國實 紗登美 コーディネーター 【動画出演】深草・瀬田の学生スタッフ有志 【広報統括】中島 崇史(職員)

## 1. 趣旨・目的

2021年に設立20周年を迎えるボランティア・NPO活動センターには、多くの学生スタッフが在籍しているのが特徴の一つとなっています。

そこで、センター黎明期から近年に至るまで、学生スタッフとして活動した元学生スタッフと現役学生スタッフに、「大学内にボランティアセンターがあることの意義」や「学生時代のボランティア活動が進路に与える影響」等を明らかにするための意識調査を実施し、今後の当センター運営に役立てると共に、大学ボランティアセンターの運営に関わる人たちにも役立てるものにと考えてきました。

このアンケート結果を分析・考察したものを20周年記念事業で発表すると共に、センター20年のあゆみを簡易にまとめたものと合わせて20周年記念誌として発行することになりました。

それと同時に、記念誌発刊も含めた一連の20周年記念事業の広報についても、動画作成やSNS発信を活用した形で取り組みました。

## 2. 概要

### 【20周年記念誌】

以下の構成で1,000部発行し、公式HPにも掲載しました。

- ・巻頭言 龍谷大学学長 入澤 崇
- ・設立20周年によせて～関係団体からのメッセージ～
- ・第1章 ボランティア・NPO活動センターの20年をふりかえって

- ・第2章 ボランティア・NPO活動センターの設立から現在に至るまで
- ・第3章 主なセンター事業のあゆみ
- ・第4章 元学生スタッフ/学生スタッフ「ボランティア」および、「大学ボランティアセンター」に関する意識調査報告書



### 【20周年記念事業各種広報】

以下のとおり作成・広報しました。

- ①チラシ、ポスター：関係団体に送付、学内に掲示
- ②ボラセンの軌跡動画作成(20本)：公式HP、SNS(Twitter、facebook)に掲載
- ③カウントダウン動画作成(12本)：SNS(Twitter、facebook)に掲載
- ④20周年イベント全編動画(Youtube)の見逃し配信と公式HPへのリンク
- ⑤プレスリリース、学内各部署および大学関係者メーリングリストへの発信等

### 3. コーディネーター所感

20周年記念事業は、イベントと記念誌発行を2つの柱に進めてきました。イベントの企画内容だけでなく、その広報手段においても様々な方法で、楽しみながら試みました。

また、記念誌においては、執筆にご協力いただいた方、アンケートに協力してくれた学

生スタッフと元学生スタッフ、アンケート分析に助言いただいた先生方など、多くの方々にご尽力いただき完成したものと実感しています。みなさまのご協力に対し、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

**ボランティア・NPO活動センター  
20周年記念事業**

**ボランティアで未来を拓く**

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターは、2001年の発足以来、多くの方々に支えられて設立20年を迎えることができました。過去を振り返りつつ、これからのボランティア活動や大学ボランティアセンターについて考え、交流しながらまた新しい一歩を踏み出す機会にしませんか？  
卒業生や大学ボランティアセンター関係者、関係団体の方々のみならず、ぜひご参加ください。

日時：2021年2月11日(木・祝日) 10:00~15:00 ※オンライン(Zoom)にて開催

午前の部 10:00~12:00  
プログラムⅠ 「なぜ、龍大ボラセンは20年続いたのか？」  
これまでの取り組み報告

プログラムⅡ 「龍大ボラセンは何を生み出したのか？」  
学生スタッフ経験者へのアンケートから読み解きます  
— 交流プログラム12:00~13:00 —

午後の部 13:00~15:00  
プログラムⅢ 「つなぐ未来へのトンネル ぶくろ未来へのプレゼント」  
現役学生スタッフによる企画

プログラムⅣ 対談  
安田 菜津紀 氏 (フォトジャーナリスト) × 入澤 崇 氏 (龍谷大学副学長)  
※各HPにてプログラム詳細を公開しておりますので、ぜひ、チェックしてください。

申込 200名 無料  
締め切り：2月9日(火)

その他、不明な点は、下記までお問い合わせください。

申込・問い合わせ先 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター  
TEL: 077-648-7252 FAX: 077-648-7201  
MAIL: ryuonc@ed.tyokoku.ac.jp

プログラムⅤ 学員対談  
安田 菜津紀 氏 プロフィール  
1987年生まれ。龍谷大学NPO法人Dialogue for People 代表理事・副理事長、龍谷大学の専任講師。『龍谷大学20年』の監修のリーダーとしてボランティアで龍谷大学を支援する活動を展開。著書『未来をつなぐ』、『つなぐ未来へのトンネル』、『ぶくろ未来へのプレゼント』、『龍谷大学20年』、『龍谷大学20年』、『龍谷大学20年』、『龍谷大学20年』として出版中。

20周年記念事業チラシ・ポスター

★広報動画★ ←NEW! 追加しました！  
現役学生スタッフが20年間の膨大な写真の中からセレクトし、繋げた動画『ボラセンの軌跡』を公開しています。  
センター公式Twitterにもアップしていますので、ぜひご覧ください。

part 17~Final  
part 13~16  
part 9~12  
part 5~8  
part 1~4

Twitterへ掲載した学生スタッフ作成の動画を、公式HPの20周年記念事業お知らせページにも掲載

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター  
@ryuonc

【「ボランティアで未来を拓く」開催まであと5日！】

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター20周年記念事業  
「ボランティアで未来を拓く」  
開催まであと5日です！  
みなさんのお申込み、お待ちしております！  
ryukoku.ac.jp/nc/event/entry...

お申込み、お忘れなく！

367件の表示 事業まであと5日 1:08 / 1:11

午後4:29 · 2021年2月6日 · Twitter Web App

10日前からカウントダウン動画をTwitterで発信

20周年記念誌「ボランティアで未来を拓く」はこちらからご覧いただけます。



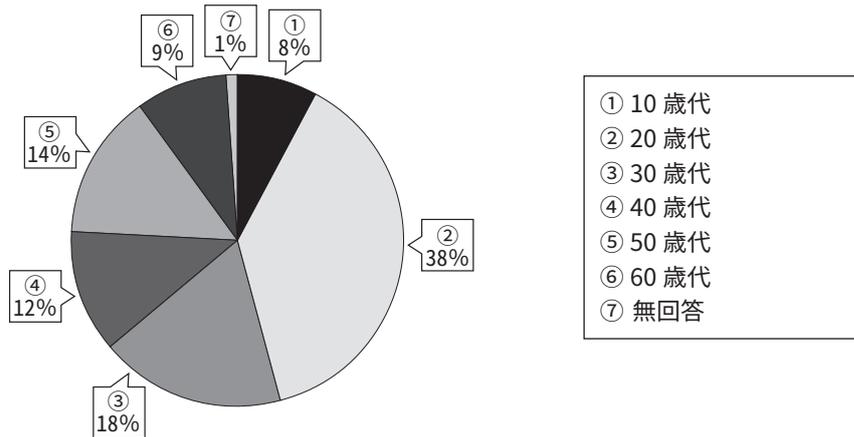
龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 20周年記念事業  
 ボランティアで未来を拓く  
 2021年2月11日（木）10:00～15:00

**参加者アンケート**

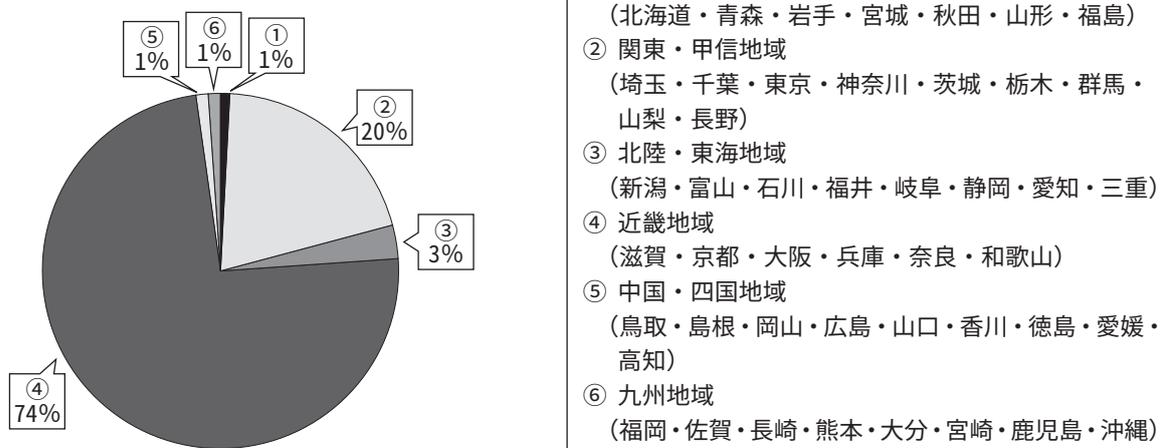
（申込数：290名 当日参加数：259名 ※パネリスト含む）

アンケート回答数 77件（見逃し配信含む）

1. 年代をご回答ください。



2. 居住地域をご回答ください。



3. この度のイベントにご参加されての満足度をご回答ください。

